

プラットワンコインコンサート

デュオ・ネリネ「めくるめくチューバの世界」

2025年3月1日 土曜日 14時開演

会場:穂の国とよはし芸術劇場 PLAT アートスペース

出演:わたなべ のぞみ(チューバ)、なかじょう ひびき(ピアノ)

【コンサートプログラム】

1. エルガー作曲、愛の挨拶

エドワード・エルガー(1857年生まれ、1934年没)はイギリスの作曲家、ヴァイオリニスト。《エニグマ変奏曲》や《威風堂々》などの代表作で知られている。《愛の挨拶》は1888年、婚約の記念に自身の妻キャロライン・アリス・ロバーツに贈ったとされる。2人の身分の格差から、アリスの親族が結婚を認めなかったため、2人の結婚は大きな障壁を乗り越えた結婚であった。

原曲はヴァイオリンとピアノのために作曲されたが、ピアノ独奏版やオーケストラ版など、近年さまざまな編成で演奏される。優美で甘美なメロディはまさに、愛に溢れたエルガーの気持ちを表しているといえる。

2. プログ作曲、チューバ・ソナタ

- 1 楽章 Calm and flowing
- 2 楽章 Prest
- 3 楽章 Slow and with freedom
- 4 楽章 Allegro

アンソニー・プログは1947年にアメリカで生まれ、トランペット奏者として早くからその才能を開花させた。1976年から1988年までロサンゼルスを拠点に演奏活動を行う傍ら作曲活動にも勤しんだ。1990年からは拠点をヨーロッパに移し、さらに活動の場を広げた。2001年に引退するまで数多くの室内楽団と共演、国際的なソリストとしてツアーを行い、オーケストラの首席奏者、音楽大学の教授として多彩なキャリアを積む。作曲家としては、協奏曲やオーケストラ、オペラまで幅広い作品を残している。特に金管楽器作品は、主要な国際コンクールや大学試験の課題曲となっている。

プログ自身が出版譜でこのように述べている。

「このソナタは穏やかで叙情的に始まり、最初のテーマは作品全体の雰囲気を決定付けている。はじけるような第 2 主題を経て最初のテーマに戻り楽章を終結に導く。第2楽章は遊び心があり軽やかさが特徴的なスケルツォ。一貫してミュートを使用することで、チューバに新たな色彩が加わる。2楽章の終わりに向かってチューバとピアノが1つのメロディを受け渡しながら一本の線を折りなしていく。第 3 楽章は内省的な性格が支配しているが、途中で拍子の変則的に変わるアレグロ・ヴィヴァーチェ(速く、活発に)によって中断される。このゆったりとした3楽章から切れ目なく第 4 楽章に直接つながる。4楽章の冒頭は既に姿を見せていた第1楽章の冒頭のモチーフによって始まる。4楽章でのモチーフは短く緊張感があり、多種多様に変形される。終結部は反復する音型が特色のオスティナート。そこでは第 1 楽章でチューバが提示したテーマに基づいている。」

3. ラフマニノフ作曲、ヴォカリーズ

セルゲイ・ラフマニノフ(1873 年生まれ、1943 年没)はロシアで活躍した作曲家、ピアニストであり、《ピアノ協奏曲第 2 番》や《鐘》など数々の名曲を生み出している。中でも、グレゴリオ聖歌の《ディエス・イレ》のメロディを作中に多く取り入れたことでも知られる。

《ヴォカリーズ》の歌い出しのメロディは、まさに《ディエス・イレ》から借用されている。ヴォカリーズとは、歌詞を伴わずに母音のみで歌う歌唱法のことを指し、この作品ももともとは歌曲として作曲された。今日では編曲され、さまざまな楽器で演奏されている。

4. ラヴェル作曲、水の戯れ

フランスの作曲家モーリス・ラヴェル(1875 年生まれ、1937 年没)によって 1901 年に作曲された。フランツ・リストの作品《エステ荘の噴水》(「巡礼の年」第 3 年より)に影響を受けて作曲されている。楽譜の冒頭にはフランスの詩人アンリ・ド・レニエの詩「水の祭典」から引用した「水にくすぐられて笑っている河の神……」という題辞が掲げられている。ペントニック(5 音音階)や時折現れる東洋的な音形によって、水のざわめきや水の華麗な動きを斬新な音色で表現している。

5. クーツィール作曲、チューバ・コンツェルティーノ

- 1 楽章 Allegro con brio
- 2 楽章 Romanza e Scherzino
- 3 楽章 Rondo Bavarese

ヤン・クーツィール(1911 年生まれ、2006 年没)はオランダで生まれ、ヨーロッパ各地で活躍した作曲家、指揮者である。指揮者として楽団の首席指揮者や音楽大学の指揮科教授などの功績を残し、引退後作曲に専念。世界中の民謡の編曲作品や、さまざまな組み合わせの管楽器と弦楽器のための室内楽曲、さらにはソロ協奏曲も作曲した。特に金管楽器に目を向け金管室内楽グループへの委嘱作品をも手がけ、金管楽器のコンクールの立ち上げやクーツィール音楽協会を設立するなど、金管楽器奏者の活躍の場を広げることに貢献した。今回演奏する作品も数多く管楽器

作品を作曲した中の1つである。

この作品は弦楽合奏との小協奏曲として 1978 年に完成し、1982 年に改訂が施された。第 1 楽章はソナタ形式で書かれている。伴奏パートに 2 拍 3 連音形を交ぜることで生じる、実際にはインテンポなのにスピード感が変化したような騙しの効果や、展開部ひとしきり続く、主題を解体したモチーフに基づく謎めいた対話風の自由な独奏(カデンツァ)が特徴的である。歩くような速さで歌い込むアンダンテ・カンタービレの第 2 楽章はロマンチックなパートに、急速な中間部が挟まれる。第 3 楽章に付された”Bavarese(バヴァレーゼ)”というイタリア語は、“バイエルン地方の”という意味を持つ(お菓子のババロアとも同義)。民謡に由来する素材をユーモラスにあしらう楽想も交えたロンド(終楽章)が、陽気でハキハキとしたタッチで作品をしめくくる。